



cm (センチメートル) 望遠鏡のサイエンス

河北 秀 世

〈京都産業大学理学部物理学科 〒603-8555 京都市北区上賀茂本山〉

e-mail: kawakthd@cc.nao.ac.jp

濤 崎 智 佳

〈自然科学研究機構国立天文台 野辺山宇宙電波観測所 〒384-1305 長野県佐久郡南牧村野辺山 462-2〉

e-mail: tomoka@nro.nao.ac.jp

現 代天文学では、すばるをはじめとする口径 8 m 以上の望遠鏡が活躍しており、さらに、30-100 m 望遠鏡計画など、より大型化を模索している時代です。大型装置からは日々エキサイティングな成果が届けられ、われわれを驚かせ楽しませてくれています。その一方で、3, 4 月号の「IRSF/SIRIUS」特集で紹介された 1.4 m 望遠鏡のように、1-2 m 級の望遠鏡もまたオリジナリティーを発揮して、さまざまなサイエンスを展開しています。そのような状況の中で、われわれは「cm 望遠鏡」に着目したこの特集を企画しました。言うまでもなくこの「cm」は波長ではなく口径のことであり、1 m 未満の望遠鏡という意味で用いています。これら小さな望遠鏡で得られたさまざまなサイエンスは、突発天体や変動天体をはじめとして、さまざまな天体を対象とした豊かな広がりを見せています。

小さな望遠鏡でのサイエンスは、アイデアとセンスが勝負であり、だからこそ醍醐味があるとも言えるでしょう。今回の特集の中の著者の一人はこう言っていました。「私たちは幸せです。この小さな望遠鏡でどんな観測ができるのでしょうか。小さいからできない、そう言って観測をしなくても、この大型望遠鏡のご時世ならそんなに怒られないかもしれません。逆にこうも言えます。私たちは不幸です。この小さな望遠鏡で観測できるからです。道具があるのに本当に何もできないなら、それは単に能がないだけだ。」と。小さな望遠鏡の能力をフルに使った「能のある」成果をご覧ください。

今回の特集では、西はりま天文台 60 cm, 大阪教育大学 50 cm, ぐんま天文台 65 cm, 京都大学グループなどの研究成果を紹介します。もちろんほかにも 1 m 前後の望遠鏡で多くの成果が出ていることは言うまでもなく、また、ここで紹介した以外に活躍している cm 望遠鏡も多くあります。将来、これらの成果を誌上で見ることを期待しつつ、巻頭言の結びとしたいと思います。特集「cm 望遠鏡のサイエンス」をお楽しみください。